



2007年(平成19年)
10月号(No. 749)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●<http://www.jac.or.jp>
e-mail●jac-room@jac.or.jp

日本山岳会への提言

日本山岳会と自然保護

山川陽一

これまでも保護か開発かは、たびたび議論されてきたように、日本山岳会の重要な活動の一環に、自然保護に関する活動があげられる。過去4年間、自然保護委員長として活動してきた山川陽一氏に、自然保護と日本山岳会のあり方について綴ってもらった。

私は昨年度まで4年間、自然保護委員長を務めました。「出る杭は打たれる」のたとえがあります。この4年間、外からたたかれ、内から突き上げられて、力不足を痛感しながら、悩み、実践してきたありのままをここに披瀝して、会員各位のご批判を仰ぎたいと思います。はたして与えられた命題に

ふさわしい内容になるかどうかかわかりませんが、この一石から更なる議論が生まれ、行動の輪が広がれば、今後の日本山岳会の展開に少しは寄与できるのではないでしょう。

日本山岳会が果たした役割

一部に「日本山岳会は山登りを

目次

日本山岳会への提言	1
日本山岳会と自然保護	1
山梨支部の山岳講座「山の博覧会」	4
富士山測候所の活用と今後の展開	6
「高所登山における突然死」を考える	7
東西南北	8
四高旅行部と『ベルグハイル』	9
支部だより	9
秋田／福井／東海	9
活動報告	12
集会委員会／図書委員会	12
図書紹介	14
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
INFORMATION	18
さんけん通信	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

趣味とした人たちの集まりで、自然保護を標榜して集まった人たちの団体ではないのだから、あまり自然保護活動に深入りすべきでない」という意見があります。また、最近「自然保護委員会はいつかから森づくり委員会に変わったのか」というお叱りの声なども聞かれます。こんな声を聞くたびに、「われわれの活動も捨てたものではないぞ!」と思うのです。なぜなら、物事はアクションがあるからリアクションがあるので、本筋さえ誤らなければ、少しばかりの行き過ぎや考え方のズレがあっても仕方がない。これはまさに、われわれがアクティブな活動をしている証拠ではないかと思うからです。何もしなければ反論も起きませんが、活路も開けません。

一例をあげましょう。昨年、伊那の入笠山一帯に大型風力発電ファームを建設するという問題が起きたこととです。この問題をJAC内に提起したとたんに、自然保護委員会や理事会の中で、反対論、推進論、慎重論が入り乱れた議論が巻き起こりました。

反対論の論旨は、「風力発電自体に反対するものではないが、それによってわれわれのフィールドである山岳環境に大きな改変をもたらすものであれば許しがたい」ということであり、推進論の主張は、「風力はクリーンで無尽蔵な自然エネルギーである。温暖化ガス削減の観点から、少々の山岳環境への悪影響は無視しても積極的に推進すべきである」というものでした。慎重論の代表格としては、「日

本山岳会は国に管轄される社團法人なのだから、国策で進める政策に抗する行為は慎重でなければならぬ」というようなものでした。それでは、この種の問題に直面したときの自身の考えはどうかというのですが、「意思決定に至るまでは聞く耳を持って慎重でなければならぬが、一旦見定めがついたら、躊躇なく行動の人でありたい」ということであり、傍観者を決め込むことは山岳人として許されないと思っています。

歴史を振り返ってみましょう。今年単独の国立公園として再スタートを切った尾瀬国立公園の中心地である尾瀬ヶ原、そこにも、かつて、ダム水没の危機がありました。戦後の復興で電力開発が国の最重要課題だった時代です。そのとき、反対運動の先頭に立ったひとりが、日本山岳会の六代目会長であり初代の自然保護委員でもあった武田久吉でした。

また、尾瀬と並んで日本の代表的な山岳美を誇る上高地にも、四十数年前、上高地側から西穂高へ懸けるロープウェイ計画や、安曇野の三郷村を基点に、鍋冠山、大

滝山、六百山を越え河童橋に至るスカイライン計画が持ち上がっていました。そのとき、「一度壊された自然は元に戻らない」と述べて日本山岳会の中に自然保護委員会を発足させて反対に立ち上がったのが、十代目会長の松方三郎でした。

あのときのふたりの勇氣ある行動がなかったら、今日の尾瀬も上高地もなかったはずだ。

他方、あの幽玄で壮大な溪谷美を誇った黒部の溪谷が、戦前戦後にわたる大規模な電源開発の代償として無残な姿に変貌していきましました。今となつては取り返しがつきませんが、冠松次郎を代表格として黒部溪谷の探訪に歴史的かわりをもつてきた日本山岳会が、自然環境を一変させたダム開発の過程でほとんど無力であったのは、われわれ山岳人として痛恨の極みではないでしょうか。

森づくりと山環ネット

さて、二十一世紀を迎えて、いまや地球環境に対する世の中の認識は一変しました。官も民も、環境に背を向けた経済最優先の開発行為は論外という風潮になりまし

た。同じ開発問題でも、近年は、前出の伊那の風力発電問題のように、温暖化ガス削減という認識を共有したなかでの開発行為の是非であつたり、大台ヶ原のように山岳環境の保全を進める上の方法論の議論であつたりするのに、つくづく時代の移ろいを実感します。

このように、大きく時代が変わるなかでは、当然、われわれが取り組む活動内容の重点も変わってきます。近年、中心的に取り組まれてきた大きな問題として、次のふたつがあります。

ひとつは、ここ数年来、全国的な広がりを見せている森づくりの活動です。北海道支部の支笏湖周辺の台風被害復興の森づくり、青森支部のブナ林再生事業、東京の高尾の森づくり、東海支部の猿投の森づくり、岐阜支部の権現の森づくり、などです。

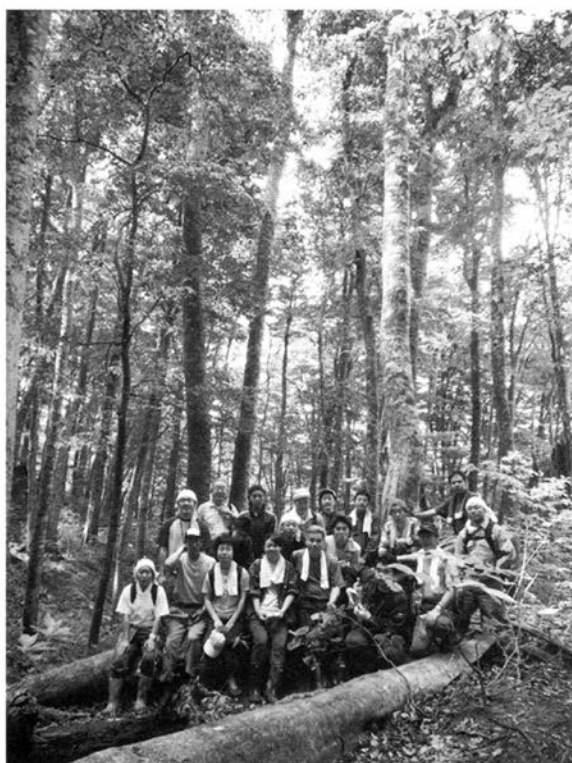
それぞれ、コンセプトはちがいますが、いずれも、地球温暖化防止や、失われた環境再生、より豊かな自然環境の創出につながる活動であり、JACC会員だけでなく一般市民と協働した社会的活動に



「上高地～西穂ロープウェイ計画」阻止の新聞記事

なっているという点が、いままでの日本山岳会の活動にはなかった特徴です。また、作業への参加を通して、小さな社会貢献ができるという心の満足と、アウトドアでいい汗を流す喜びを同時に味わえるところが、多くの会員に受け入れられている原因ではないでしょうか。

もうひとつは、「山の環境ネットワーク(山環ネット)」の活動です。登山の大衆化に伴って、われわれ登山者自身が、無意識のうちにかわり、時には加害者になってしまっている山の環境問題があります。



白神山地のブナ林再生事業

小さな集落が、村になり、町になり、大都会になるに従って、そのコミュニティの中で快適な共同生活を維持するために、新しいルールができ、守るべきマナーが重視されるようになります。それと同じことが、山においても起きています。高山植物の盗掘や踏み荒らし、山のトイレ問題、登山道のあり方、それらにつながる入山規制の是非などですが、われわれ自身の問題として、これらの問題の解決のため継続努力をしようという試みです。

この活動の特徴は、日本山岳会

の会員であれば、ネットを使って全国津々浦々誰でも参加できるところです。試行錯誤の末、現在は、メーリングリストを使ってメンバー間の議論を進めています。発足後1年を過ぎ、ようやく軌道に乗ってきました。北海道から九州小笠原までのメンバーが、距離のハンデを乗り越えて議論に参加できることは、なんと素晴らしいことでしょう。

地方からの動き

さて、自然保護委員会の運営体制は、本部のメンバーに加えて、

全国28支部に100名に及ぶ支部自然保護委員が選ばれています。これらのメンバーが、年1回顔を合わせ、各支部の活動状況を発表し、共通テーマを話し合う場が、自然保護全国集会です。

環境問題は、基本的に地方の問題（東京地方も含めて）です。地元に着した活動として支部が中心になって動くのが本筋です。本部は、大きな方向性やフレームを決めたり、全国的な問題に対処する以外は、支部の活動を助長するようサポートしないしはコーディネーター的に動くのがいいと思います。支部によって、複数の委員で支部自然保護委員会を形成して活動しているところと、まだそこまで至っていないところとまちまちですが、いずれ、どの支部でも委員会を形成するようになれば、更に前進した活動が期待出来ると思います。

数年前実施したJACの会員アンケートの結果によれば、会員が「強化・充実してほしい事業」のトップ（58票）が自然保護という結果が出ました。これだけの日本山岳会の会員が、山の環境問題に大きな関心をもっているわけですか

ら、自然保護委員会の活動も、常にJAC全会員に対して広く門戸を開放した活動を心がけていく必要があるでしょう。

活発な活動があるところには必ず人が集まります。地道に活動を積み重ね、その輪を広げていくことが大事です。また、成果を積極的に公表することで、対外的にも評価されるようになるでしょう。

その場が、2カ月に1回刊行している機関紙『木の目草の芽』であり、ホームページであり、全国集会です。山環ネットに参加して自分の意見を展開するのもいいと思います。会報『山』も、もっともっと活用させてもらいたいと思っています。

日本山岳会のメンバーは多士済々です。山の環境問題なら日本山岳会」と言われるくらい、社会的にも輝きを増していきたいものだと思っています。



山梨支部の山岳講座「山の博覧会」

深沢健三

山梨学院大の協力

山梨支部は平成17年から山岳講座「山の博覧会」山を知ろう山へ行こう」を年1回、開いている。山を知って登れば、登山はもっと楽しくなる、との趣旨で、過去3回の博覧会には合計1100人を超える登山愛好者や自然に関心のある人たちの参加を得ることができた。支部は平成20年に創立60周年を迎える。博覧会をきっかけに、支部活動の一層の発展を目指している。

「山の博覧会」というネーミングは、私達が考えついたものではない。実施に当たって全面的な協力をしてくれている山梨学院大の教授が付けたものだ。この辺にこの企画のポイントがあるのだが、それは後で触れる。日本山岳会100周年が近づいた平成15年、支部も100周年を機会に何かをしよう、という動きが出てきた。

ご多分に漏れず支部も高齢化が進み、現役並みの登山はできない。一方、支部と山梨県山岳連盟は、

昭和23年12月11日、一緒に創立した。そうした背景があつて、支部と岳連は表裏一体の関係にあり、支部員のほとんどは岳連加盟の山岳会にも加入していて、岳連役員も兼ねる例が多い。こうした事情のなかで、支部はどんな役割を果たしていくべきか。そこで生まれてきたのが、「現役登山は岳連、支部はシンクタンクの役割を」という考え方だった。経験豊富など隠居が、若い跡継ぎにいろんなことを伝授する――、そんなところだろうか。

そんな時、100周年にあたって本部から「登山の普及」「山岳文化の継承」という位置づけが提案された。この位置づけと、隠居活動の結合から生まれたのが「山の博覧会」だった。登山を取り巻く状況は、山岳会に所属しない登山愛好者が大多数を占めている。100周年の事業は、身内だけが満足するものでいいのか。多くの人が参加して、参加者のためになる企画はないか、そんな模索が続

いた。

山岳講座、講演会、シンポジウム、登山教室など、いくつかの案が出た。登山の普及と登山文化の継承が目的だから、1回では終わらせないことを原則にした。しかし重大な難関が生まれた。支部にそんな力量があるのか、ということだった。会場、講師の交渉、準備、PR、当日の運営、さらに予算。そこでパートナー探しが始まり、山梨学院大学生涯学習センターの協力が得られることになって、平成17年7月9日、第1回開催にこぎつけた。

魅力あるテーマと講師

会場は700人収容の大ホール、開催は年1回、夏山シーズン前、100周年から支部60周年につなげるため平成17年から20年まで4年間開催。4年間のテーマは第1回「山の魅力」、第2回「山と自然」、第3回「山と文化」、第4回「登山フェスティバル」、講師は一流なことを決めた。

第1回の講師は、エヴェレスト女性最高齢登頂の渡辺玉枝さん、元文部省登山研修所長で大町山岳博物館長の柳沢昭夫さん、「岳人」

元編集長の永田秀樹さん。演題はそれぞれ「山登りの楽しみ」、「登山の発展と安全技術」、「山の魅力――カラコルム、シベリアから」。さらに山岳映像研究家の羽田栄治さんの解説で、「立山、針ノ木、薬師越え」「雪の赤石岳」という2本の記録映画の上映があった。

登山愛好者や自然監視員、県内の観光ボランティア、生涯学習講座生などが個人、夫婦、グループで450人が参加。大正末期撮影の貴重な映像に驚き、3人の講師の話に聞き入っていた。特に「雪の赤石岳」は、山梨の先人が撮影



400人を超える人たちが講演に聞きいった (第2回)



開会のあいさつをする古屋学而支部長 (第1回)

したものであり、さらに講師の渡辺さんは富士河口湖町在住、永田さんも甲府出身とあって馴染みもあった。

第2回は18年6月24日開催され、テーマは「山と自然」。羽田さんの解説で『交響詩 立山』、『雲表の山々・南アルプス』を上映。東京学芸大の小泉武栄教授が「山の自然学」——高山植物の不思議、山梨大名誉教授の石田高さんが「山梨の山——成り立ちの秘密」と題して講演した。

小泉さんは地質と植物、石田さんは地学から山の自然を紹介した。

『雲表の山々』は、昭和30年代に山梨県が観光映画として製作したもので、羽田さんがかわった作品。約430人が会場を訪れた。

第3回は19年7月7日に開催した。テーマは「山と文化」。信州大教授の笹本正治さんが「山の生活と歴史」、登山家で随筆家の山口耀久さんが「私と八ヶ岳」と題して講演した。また「山の歌を歌おう」と題してアコーディオン伴奏と歌唱指導つきで、山の歌を十数曲合唱した。出席は約250人。山口さんの人気は高く、著書のコーナーには人垣ができた。

外に開かれたイベント

成功といえる原因は、パートナーに山梨学院大を選んだことにある。山岳会は閉鎖的なところがあり、逆に他団体は山岳会のことなど知らない。今回の選択は異業種交流であり、支部を、開かれた団体にしたことだった。国立大学が独立法人に変わるなど、大学は生き残りに様々な対応を強いられている。箱根駅伝で知られた山梨学院大も同様だ。外に開かれた存在であることを重視している。

当初は山梨大学、山梨県生涯学

習推進センターも考えたが、融通のきく民間の大学にした。山梨学院大との交渉は16年9月から始まった。支部の身の丈を超えていることをよく理解してくれて、山岳講座を生涯学習講座の中に組み込むことになった。17年6月まで続いた打ち合わせでは、毎回大学側が議事録と合意事項をまとめてくれた。

最終的には、大学側が700人収容の大ホールや講師控え室、ビデオ収録や音響担当を無償で提供してくれることになった。さらに支部とは別に講師謝礼、学生アルバイトの人件費、会場に飾る生花まで負担してくれた。また案内チラシは大学の生涯学習講座生に大学負担で送付。当日も会場に職員が常駐し、受付名簿の整理、受講申し込みの窓口も引き受けてくれた。

こうした物的援助だけでなく、運営のノウハウも授けてもらった。「山の博覧会」のネーミングは、担当教授が打ち合わせのなかで「山に関わるいろんなことをやるのだから、博覧会のようなじゃないですか。メインタイトルは山の博覧会にしましょう」と提案して決まっ

たという経緯がある。すっかり定着した。

このほか山梨県生涯学習センターにも、受講印がもらえる講座の一つに位置づけてもらった。山梨県は8月8日を「山の日」に制定していて、様々なイベントに名義後援しているが、山の博覧会もその一つで、PRのほか会場でのお土産を提供してもらっている。

山梨学院大はキャンパスにFM甲府というラジオ局をもっている。博覧会のPR、講演内容を番組に組み込んでいる。山梨日日新聞には、毎回破格の扱いでPRしてもらっている。

これらは支部員の人脈を最大限に生かしたもので、「時(100周年から60周年)」と場所(地の利)と人(人の利)が見事にかみ合った企画といえる。

平成20年の山の博覧会は「登山フェスティバル」を予定している。100周年、60周年用にと積み立ててきた支部の特別会計も残り少なくなってきた。19年には本部から補助金の交付があり、感謝している。少ない予算ながら、知恵を絞って、山好きな人たちに喜ばれ、役に立つ内容で有終の美を飾りたい。

富士山測候所の活用と今後の展開

浅野勝己 (NPO富士山測候所を活用する会理事長)

以前「山」で「富士山測候所のゆくえ」と題して同僚の堀井昌子理事が報告されているので、その続報として最新の情報を述べてみよう。

田中文男氏 (日本山岳協会会長)、今井通子氏、田部井淳子氏ら多くの山岳関係者が参加している。

気象庁は約4年にわたる跡地利用検討委員会の中間報告で、「極地高所科学研究拠点とする。ただし受け皿が未定」との結論を発表した。そこで無人化直前の3年前の8月に、約50人からなる「富士山高所科学研究会」を創設し、各省庁を回って受け皿を探してきた。

この2年間、よみがえれ富士山測候所」をテーマに市民向けのシンポジウムを3回開催し、さらに外国研究者を迎えての国際会議を3回にわたり開催している。

しかし残念ながら、成果は得られなかった。そこで05年11月、NPO法人設立総会を開き、事務手続き後、内閣府へ申請。06年4月、富士山測候所を活用する会としてNPO法人の認証を受けることが出来た。現在160人の会員で構成され、07年5月には2年目の理事会総会を開催したところである。

最も新しいところでは、07年7月17日、電通の支援により新橋電通ホールに約2000人の聴衆を集めて「世界エコサイエンスネットワーク会議」を盛大に開催した。

電通では毎年、新入社員の富士登山を実施しており、今年で80周年を迎えた経緯があり、本会議を開催する運びとなった。従って、「第80回電通富士登山記念、富士山発世界の極地高所研究所から地球の未来を見張る」がサブテーマとなった次第である。外国からは大気化学者5人と高所医学者1人の計6人が討論に参加した。高所医学のレヴィン教授 (テキサス大) は米国内のバイクス峰 (4300m) などの高所科学研究所の活動状況

を紹介され、富士山頂での研究の重要性を指摘された。私は、富士山頂を①高山病予防のセンターにしたい、②高所順応の基地にしたい、③高所医学研究の拠点にしたい、という日本登山医学会での3決議を紹介した。

一方、大気観測施設としての必要性が指摘され、地球温暖化の現状把握のためにも研究ネットワークの重要性が強調された。会議の最後に大気化学のシュネル博士 (ハワイ・マウナロア研究所) が代表で「地球環境観測ネットワーク構築宣言」を提案し、参加者一同が署名、合意した。

さて気象庁は3年前の無人化決定後も、昨年までは、7、8月の2カ月間は常駐して管理を継続していたが、本年度は完全に非常駐化が実施された。そこで、昨年4月の国会での法改正により国有財産の民間への有償貸付が可能となり、5月18日に活用団体を募る公募が行なわれた。これに私たちNPOが応募し、6月14日に承認の通知を受け、6月21日に気象庁と国有財産有償貸付契約書に調印することができた。

これにより7月10日から9月5



7月17日の世界エコサイエンスネットワーク会議で

日までの2カ月間、私たちNPO法人が民間団体としてわが国で初めて国有財産である富士山測候所を活用することができた。3人の常駐者が管理に当たり、各研究者が9件の研究テーマ (高所医学4件、大気化学2件、植物生態学1件、宇宙線科学1件、安全システム1件) を精力的に研究・調査し、成果を挙げる事ができた。高所医学分野では、登山者の心機能検査、睡眠時を含む山頂滞在中の心拍、酸素飽和度の変動の連続測定など、基本的な計測から「新発見」の続出する貴重な資料が得られつつある。

これらの成果をもとに、山頂での高所順応後に海外の高峰登山に参加し、高所障害や2・1型におよぶ致死率の遭難を予防できるようなことが将来の夢である。

「高所登山における突然死」を考える

野口いづみ

9月(748)号『山』で報告

したように、増山茂氏と貫田宗男氏の尽力によって、8月にシンポジウム「高所登山における突然死を考える」が開催された。今号ではシンポジウムに沿って内容を検討してみたい、テーマは、医学的なテーマと商業公募隊という社会的なテーマの2点だ。

高所で病死という点、以前は急性高山病が原因と思われていた。しかし、最近、急性高山病が死因ではない突然死の報告が目立つようになった。突然死とは、内科的な病気によって予想しないとき急に死亡することである。数分以内に死亡する瞬間死または突然死と、24時間以内に死亡する急死に分けられる。主な病因は、心疾患(心筋梗塞や不整脈)によるものが6割前後、脳卒中(脳梗塞、脳出血、クモ膜下出血)が2割前後、その他は大動脈の破裂などと、血管の病気が多い。突然死が増加したのは、以前よりも高齢者が高所登山をするようになったためと考えら

れる。

突然死の頻度は、一般には1000人集まる所で1年に1人だが、山ではその2・5倍である。ハイリスクは55歳以上の男性で、高血圧、高尿酸値、肥満、心疾患、ヘビースモーカーなども危険度を高める。登山は運動負荷によって心臓がオーバーワークの状態になるが、高血圧症や心疾患のある登山者では安全の上限までの余裕が少なくない。これらに加えて、高所では気圧が低く、酸素が薄く、気温が低い。こうした条件は突然死の原因となる心筋梗塞や不整脈を引き起こしやすくさせる。しかし、高所での程度、突然死が増えるのか、どのような死因によるものかについては未検討である。

エヴェレスト登頂直後に突然死したI氏について、大蔵喜福氏は既往歴に問題はなく、登頂時も体調に異常がなかったと報告した。南極越冬隊の越智勝治氏は、低圧低酸素低温下で不整脈を起こした隊員が、常圧環境下では消失した

例について報告し、循環器内科医師の高山守正氏はI氏の死因が不整脈の可能性が高いとコメントを寄せた。高所環境で不整脈を起こしやすい人が、高頻度で突然死を生じる可能性も考えられる。

60歳を過ぎれば呼吸循環器系などの慢性的な疾患を有している人も少なくない。しかし、残念ながら中高年登山者にその自覚が薄い。高所での死亡事故は遺族にとっても納得のいかない事態になる場合もある。上小牧憲寛氏は、高齢になるほど突然死のリスクが高くなることを啓蒙する必要があると指摘し、危険度が高いことを本人と家族に説明する必要があると述べた。

対応策は登山前に健康診断を受けることであり、日本登山医学会の堀井昌子氏が構築した「登山者検診ネットワーク」が有効に機能することが期待される。反面、I氏の例が示すように、事前の診断は必ずしも確実とは言えず、限界があるのも事実である。高山氏と上小牧氏が厳しい指摘をしているように、高齢者が高所登山をする場合にはそれ相応の覚悟が必要といえるだろう。

大蔵隊の順応行動について、古野淳氏が不十分であった可能性を指摘したが、山本正嘉氏は、大蔵戦略は従来の順応の概念とは異なるが、高所に長く滞在しないことは筋肉量が落ちず、赤血球が増えずにメリットがあり、合理的であるとバックアップした。今後の実績の集積を待ちたい。

商業公募隊については、池田常道氏、磯野剛太氏、谷口ケイ氏はメリットは大きい、クライアントがリスクを自覚する必要性があることを指摘した。重廣恒夫氏は、公募登山隊では参加者の能力が不足している場合があることと、ガイドも極限状態にある危険性を指摘し、さらに山岳ガイドの職業倫理とリーダーとガイドの違いについて言及した。加藤慶信氏はクライアントの体調を細かくチェックし、ロープを常に結んで安全を確保しながら登った経験について述べた。ガイドとクライアントの関係、安全の確保について、考えさせられた。

今後、登山者の高齢化に伴う突然死増加の問題、参加者と商業公募隊の問題、さらにこれらの関係についての検討が必要だろう。

N 東 西 南 北 S

四高旅行部と『ベルグハイル』

鈴木正規

旧第四高等学校(現・金沢大学)旅行部は、学校団体旅行部としては日本最古であると言われている。だが、創立年月日となると、はっきりとはわからない。おそらく、明治中期以降のことではないかと思う。

部創立後の明治時代から大正時代の中ごろまでは、旅行部ではなく遠足部であったが、この遠足部を山岳部と言うわけにはいかないだろう。もし、山岳部とみなされるならば、日本山岳会より7年も古いことになり、その当時の記録が存在するならば、今では貴重な資料になることは間違いないと思う。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

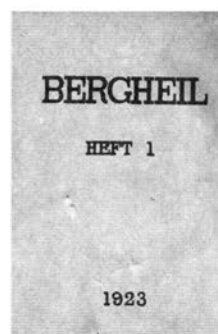
大正12年、旅行部で部報を発刊することになり、部誌名を『BERGHEIL』(ベルグハイル)と名づけた。そして部報『ベルグハイル』は、昭和16年に13号を最後に廃刊となった。

昭和25年3月に、戦後の学制改革により第四高等学校は閉校となり、現在は石川県郷土資料館となっている。

*

次に部報『BERGHEIL』(ベルグハイル)の各号の目次を見てみよう。

- 「1号」 大正12年12月発行(124頁) 冬の白山・白川郷、雪の槍のピークから穂高岳
- 「2号」 大正14年2月発行(97頁) 白山・別山スキー登山、3月の別山より白山
- 「3号」 大正15年12月発行(168頁) 冬の加越国境の山々、北部白山山脈考



『ベルグハイル』1号の表紙

- 「4号」 昭和3年12月発行(251頁) 3月の大長山より白山、冬の大長山と大日岳
- 「5号」 昭和4年12月発行(241頁) 3月の大長山より別山、春の別山尾根
- 「6号」 昭和6年1月発行(261頁) 春の白山釈迦岳より白山、春の願教寺山
- 「7号」 昭和6年12月発行(212頁) 3月の白山・大野スキー行、小窓遭難について
- 「8号」 昭和8年2月発行(122頁) 剣のチンネ岩登り、春の別山尾根より白山
- 「9号」 昭和9年2月発行(146頁) 冬の富士写ヶ岳、3月の三方崩山、春の白山
- 「10号」 昭和10年2月発行(113頁) 3月の三方崩山と大日川、剣の東面合宿
- 「11号」 昭和11年2月発行(75頁) 尾添ハラヒ谷より白山、雪の

立山と浄土山
 「12号」 昭和13年5月発行(130頁) 剣沢合宿、飯田稔君の遭難について
 「13号」 昭和16年6月発行(124頁) 白山山脈の横断、白頭山、白山遭難顛末

*
 昭和18年頃には、戦局も悪化し、生活全般の物資も底をつきはじめていた。こんな時代だから、不急不用の本の出版などは後回しにされるのが常であって、部報の発行などは、とうてい夢を追う時代となつたのが現実のようだ。

新

【ヒマラヤの山旅】【ニュージーランドの山旅】
【フロンティアの山旅】【日本の山旅】完成!
2007.10~2008.5

国土交通大臣登録旅行業第490号/財団法人日本旅行業協会正会員 日本観光振興会

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911
 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
 e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

秋田支部

高場森と安ノ滝上流部探訪

高場森と安ノ滝上流部探訪の支部山行を行なった。

第1日目、7月28日は佐渡杉、

桃洞杉の原生林として有名な奥森吉の高場森の散策であった。参加者15名、森吉山麓高原から黒石川林道を進み、森吉山ノロ川登山コースから入山。10分程進むと森吉山と高場森分岐に出る。この頃から心配していた雨が降り出した。

雨具を着け、ブナ樹林帯の中の緩やかな登山道を進む。登山道は木道や木階段で整備されているので多少の雨でも心配はない。

緩やかな登山道をブナ、ミズナラ、ホオノキなど堀井自然観察指導員から説明を聞きながら進む。雨のせいで霧が立ち込め、杉の古木が林立するこのあたりは幻想的で美しい。登山道脇に咲く可愛ら

しい花に目をとめ、その名を確認したりしながら進み、1時間ほどで三等三角点のある高場森に到着。雨もようやく上がり、天然記念物桃洞・佐渡杉原生林の標柱の前で記念撮影をして下山。

昼食後、柚温泉で入浴し、阿仁異人館を見学してから今夜の会場上岱集会所に到着。地元加賀谷会員の手配による熊汁に舌鼓をうち、特上のどぶろくに酔い、懇親会は夜遅くまで盛大に繰り広げられた。第2日目、29日は加賀谷会員の案内による安ノ滝上流部の探訪である。昨日の雨はどこへやら、青空も広がり、最高の沢歩きの日となった。

参加者21名、阿仁打当温泉を過ぎ、安ノ滝園地からさらにヒヤコ沢に沿って林道を進み、駐車地点まで。ここから山道に入り約1時間、裏安ノ滝遊歩道に出る(佐渡杉・桃洞杉分岐点)。その昔、赤水



6段になって流れる金兵衛滝をバックに

峠を越え、玉川温泉へ往來した湯治道と聞き、よくぞ玉川まで歩いたものと感動する。ここからトウドウ沢の出合に進み、合流点にザックをデポする。滑滝や甌穴の連続する、滑らかな岩床の沢歩きが始まりだ。

身軽になって沢の探訪に出発したが、最初の階段状の穴滝を渡るのにこずった。斜度のある穴滝の僅かな淵を木の枝につかまり登る。甌穴群の沢の中を足元に気をつかいながら進み、沢を抜けて裏安ノ滝遊歩道に出、高場森への分岐まで。分岐から草木の覆いかぶさる岩床を歩く。所どころに水を溜め、段差もあり、泥に足をとら

れる箇所もあったが、まるで道のように岩床は続いていた。

やがて大きな滑滝がいくつか続き、ヤブに入り回り込む。最後に高さ10メートル程の滝を高巻きして回り込むと平滑ノ滝となり、安ノ滝上部に出た。安ノ滝は高さ90メートルの二段構造で、日本の滝百選にも選ばれた東北屈指の名瀑である。昔、恋のため身投げをした美しい娘・ヤスガ、中秋の名月の夜に髪を梳くという伝説が残っている。

ここからトウドウ沢を遡る。僅かな足場をたよりに木の枝につかまったり、飛び跳ねて渡ったり、高巻きしたり、広い岩床をゆつたりと歩いたり、イワナを見つけて歓声をあげたりしながらザックをデポした合流点に戻り、昼食となった。夏の陽射しを受け、沢の中で水音を聞きながらの昼食は格別であった。

午後は、階段状に続く滑滝、甌穴群の甚兵衛沢へ。六段になって流れる金兵衛滝を背に記念写真。

まもなく草木の覆いかぶさる砂礫の川床の流れの中を歩く。川岸にいくつかの熊の痕跡を見つけたので、念のため爆竹に点火する。まもなく裏安ノ滝遊歩道に出て、佐

渡杉・桃洞杉分岐点に戻る。

ゆつくりと駐車地点に向かいながら、お天気に恵まれた最高の山行だったことに感謝した。

(鈴木裕子)

福井支部

白山親子登山

白山親子登山を38名の参加を得て、開催した。

8月11日7時、バス1台で出発。バスの中で注意事項とこの親子登山の意義を筆者が説明する。人間としての成長過程で、自然から学べる感性は15歳までの少年期が大事と思われる。福井支部では、福井新聞社とFBC福井放送との企画のなかでこの事業に協力し、今年で第11回目となる。

筆者が発起人として立ち上げた「福井くろもりクラブ」が20周年の事業として、白山開山の泰澄が歩いた、越知山から白山までの100⁺の道を8コースに分けて踏査している。今年は猛暑の日が多く、熱中症が心配されたが、8コース目の白山禅定道を踏破することになったので、親子登山も別当出合から観光新道を使い禅定道の



親子の絆を深めた白山親子登山参加者

一部を登ることになった。1300年の歴史の道に思いを馳せるひとときとなればと思う。

白山は、富士山、立山とともに日本三名山のひとつで、福井県人には登りたい山のひとつ。

別当出合の駐車場にバスが9時に着く。出合の休憩所まで足慣らしで登り、準備体操をして、急坂の観光新道をゆつくり登る。禅定道の分岐に出ると、展望が良く、歓声があがる。しかし暑い。親子の1組が遅れだす。小学6年で70⁺と肥満気味だ。

ドクターの松原会員と福井新聞社の前田さん、船田会員が後尾を務める。このコースの中間点であ

る展望の良い仙人窟を過ぎると高山植物の花々が迎えてくれるなか、殿ヶ池に着き大休憩。パーティはばらけたが、溶岩が固まってできた黒ぼこ岩で、くろゆりのパーティと合流する。ここから山縣会員が先導し室堂セクターに案内する。筆者はここで後続者を待ち、1時間遅れで室堂に着く。

翌日のご来光は快晴の中、槍ヶ岳をはじめ北アルプスの山々に参加者一同感激し、帰りはエコーラインのお花を賞でながら、無事別当出合に着き、親子の絆が深まった山行となった。

(宮本数男)

東海支部

シャルミリ峰(6069m)登頂

本年の日・印友好年を記念して、中高年主体の「日・印友好第9次インドヒマラヤ学術登山隊2007」をインドヒマラヤのシャルミリ峰(CB53)に派遣した。

シャルミリ峰は、CB山群のほぼ中央部に位置していて、1980年群馬高体連隊によって初登頂された。6000⁺をわずかに上まわる山だが、周囲を複合流域氷河に囲まれ、2段のアイスフォール



個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

ル、高差400⁺の雪壁など、ヒマラヤらしい山容をしている。

登山隊は、7月19日、登山基地のマナリに集結し、標高3600⁺のカザで3日間の高所順応後、7月23日、バタルからキャラバンをスタートした。

南タッカ氷河からの濁流を、1本のワイヤーブリッジに身を託して渡り、広大な草原をトラバース気味に登る。身を切るように冷たい沢の徒渉後、7月25日、標高4200⁺の氷河湖畔にBCを設営した。

計画では、サムンダラ・タブ氷



シャルミリ峰 (C B 53) 6069m 南峰

河上4500^{メートル}にBCを設営する予定であったが、そこに至るサイドモレーンが、氷河の後退にともなって荒れはて、あちこちに開いているクレバスは、毎日陥没する状態で、馬が上ることが出来なかった。そこで、人力による荷上げにきり替え、7月29日、氷河上4500^{メートル}にABCを設営。ここを事実上のBCとした。

第1アイスフォールは固定ロープ1ピッチで突破。第2アイスフォールは、落石をさけながら右手

のルンゼを登りきり、上部雪原のクレバス帯を迂回しつつ、8月3日5500^{メートル}にC2を設営した。この日から天気が悪化し、C1より上は降雪にみまわれた。C1で急性高山病になった隊員1名は、8月2日、登山隊長とともにBCへ下山した。

8月5日、頂上へ向け岩壁、雪壁を直上する。そして、足立、松原、杉浦の3隊員が、5名のインド人スタッフと共に登頂した。小雪の舞う中での出発であったが、頂上に達した時には天候は回復した。これにより、1988年から始まった支部の中高年主体のインドヒマラヤ登山隊は、計12隊13座に登頂(初登頂5座)を果たした。

北アルプス —リーダーの必読書— 大日岳の事故と事件

斎藤惇生 編/A5判/190頁/1995円



山の事故は事件になるのか。ふたりのわかい命をうばった北アルプス大日岳の雪底崩落はどうしておきたのか。事故がなぜ事件になったのか。有為の少壮弁護士が核心にせまる。雪氷学研究の権威は、巨大雪庇の構造を世界にさがけてあきらかにした。本書はリーダーたるものの必読書である。(国立民族学博物館顧問・日本山岳会名誉会員 梅棹忠夫)

—樹林の旅が楽しめる奥美濃—

三訂 奥 美 濃

—ヤブ山登山のすずめ—

高木泰夫 著/四六判/244頁/1890円

春は屋根の残雪を踏んで頂上へ。新緑萌える頃は白やピンクの花の咲く道を、夏は魚影を追って溪谷をつめ、秋は燃える樹林の中の古い峠道を辿る。

〒606-8161 京都市左京区 一乗寺木ノ本町15 **ナカニシヤ出版** Tel. 075-723-0111 Fax. 075-723-0095
http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]

残念ながら、中高年ゆえの体力低下を、インド人スタッフに頼るタクティックスでの登山であるが、50歳以上の登頂者は延べ53名(内女性15名)に達した。

C2より、頂上稜線にいたる高差400^{メートル}の雪壁は、BCから見た際、初登頂時に比べて岩場の部分が広がって、かなり難しい登山になると直感した。実際、頂上直下の稜線まで約500^{メートル}のロープを固定した。この突破には、アイスクリュー18本、ロックハーケン6枚を使用した。

学術隊は登山活動と並行して、スピティ地区のピン谷、シャルミリ峰周辺の地質調査を行なった。

【登山隊】登山隊長 鈴木常夫(72) / 隊員 足立直行(64)、伊藤利弘(65)、杉浦吉治(65)、松原立雄(73) / 学術隊長 田辺元祥(57)、中村睦明(65) / インド政府連絡官 1名 / BC マネージャー 1名 / マナリ登山学校インストラクター 2名 / 高所ポーター 4名 / コック 1名 / キッチンボーイ 1名

(鈴木常夫)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集委員会

「北信三山放射登山」

8月4日～7日「北信三山放射登山」に参加した。

4日は宿舎の戸隠小舎へ正午集合。宿の車で戸隠キャンプ場へ送ってもらい、戸隠観光協会主催の「ミセス・ウエストン祭」に参加。式典や岐阜県のガールスカウトによる歌、長野のホルンクラブによるアルペンホルンなど野外コンサートを楽しんだ。終わる頃、雨が降り出し、迎えの車で宿へ急ぐ。おいしい夕食をいただき、明日の高妻山登山に備えて早く寝る。

5日は宿の車で登山口の戸隠牧場まで送ってもらい、6時頃から登山開始。一不動まで2時間半。途中の帯岩はガイドブックで危険箇所になっていたので緊張していたが、大きなステップが切ってあり、難なく通過、ホッとする。二



暑くて長かった高妻山山頂

釈迦、三文殊と過ぎ、五地藏岳でひと休み。その後も延々と登り下りが続く、最後の急登でバテバテになるが、ようやく十阿弥陀に着き、頂上が見え、ホッとす。久しぶりの百名山にかなり苦戦した。6日は黒姫山。種池、古池を見ながら広い登山道を行く。ブナやダケカンバが美しく気持ちのいい森が続く。外輪山へ出ると広々と

した高原の景色が眼下に見えてくる。振り返ると、昨日登った高妻山が大きい。頂上では雲の切れ間から妙高山も見えた。この山は樹林帯が美しく、秋の紅葉はさぞ素晴らしいと思わせる。

7日は飯綱山。戸隠スキー場からゆるやかな斜面を黙々と登る。頭がボォーとする登りだ。ワラビの葉が一面にある。春に取りに来たいなと思いい、でも2時間かけてこの斜面を登る価値があるのかとも思い返す。飯綱山頂には夏休みらしく子供連れもたくさんいた。南登山道を往復する人が多いらしい。山頂から下って西登山道への分岐あたりまでのお花畑にはシモツケソウ、ハクサンフウロ、コバギボウシ、クガイソウ等、たくさんの花が咲いていた。西登山道に入ると人がいなくなる。ここの森も明るく美しい。下ってから戸隠神告げ温泉へ入り、ソバを食べて解散。3泊4日の山旅を終えた。

久し振りに真夏の暑い時期に山へ登り、高妻山のハードさに疲れ果てた。帰宅後、愛知県は連日37度以上の酷暑日が続く。ああ、秋山が恋しい。

(武田頼子)

図書委員会

第36回山岳史懇談会「東海支部の山登り」

9月27日、図書委員会主催の第36回山岳史懇談会が、104号室で宮下秀樹会長も参加して開催された。山岳史懇談会は、昨年より従来の方向(大学山岳部・旧制高校山岳部・先鋭的社会人山岳部の話)から支部の山登りにテーマを移し、北海道支部に続くシリーズの第2回目となった。寺西申生氏(東海支部評議員)と尾上昇氏(東海支部常任評議員)を迎え、独自の登山活動によって数々の遠征記録を持つ東海支部にその輝かしい足跡を語ってもらった。

*

まず昭和48年、36年前に東海からもヒマラヤに行きたいとして設立された思い出が語られた。支部会員(276人)と支部友会員(524人)の構成、知的障害者の登山を援助するボランティア委員会を始めとする22の委員会の活動、支部報の年4回発刊などの報告があり、次いで東海支部創立の心である海外登山を中心に話が展開した。アコンカグア南壁とマカルーの

平成19年度 年次晩餐会のお知らせ

恒例となりました平成19年度の年次晩餐会は、東京にて開催いたします。今年の催しとして当会所蔵の貴重な「絵画」を中心に、支部・委員会・同好会が各自慢のコーナーを展示、またフリーマーケット、講演会は「海外登山隊の報告会」、秩父宮記念山岳賞受賞者講演（審査中）等を準備しております。

日時 平成19年12月1日(土) 開宴午後6時

場所 グランドプリンスホテル新高輪

(旧新高輪プリンスホテル)

国際館パミール「北辰」

会費 15000円

〈晩餐会記念山行〉12月2日(日)

丹沢山塊の中でも最も多くの人が訪れる大山(神奈川県)です。詳細は18頁参照。

総務委員会

登頂という華々しいデビュー、三蔵法師の通ったルートを検証した三次にわたる雪蓮峰登山隊、中高年によって立ち上げられたインドヒマラヤ実年登山隊、非常にユニークな企画であった環太平洋環境調査登山隊、第二期黄金期に実施されたクラウン峰登山隊、そのクラウンの余勢をかった若手2人の壮絶なウルタルII峰登頂、また、出発前に隊長の死という悲劇を乗り越えたK2隊の成功、そして冬期ローツェ南壁と続く輝かしい海外登山の話が続いた。登山隊の裏面史や後日談・余談から過激な話

話をまじえ、そしてマカールの思ひ出の歌(ジグリー)も出るという多彩な報告であった。
東海支部の海外登山の流れは、第一期は若手が台頭してマカールを成功させた時代、第二期は原真氏による「ハライズム」が浸透した過激な時代——これは現在も受け継がれていると思われる、第三期の民主的(玉石混交)時代、第四期のローツェ南壁のビッククラム時代と華やかなものであった。だがさて、東海支部はこれからどこに向かうのか、海外登山の情熱が脈々と受け継がれていくのか。

話は誠にももしろく続いた。
東海支部がこれほどまでに独自の企画で、資金も人も集めて活発な活動を持続できた背景には、支部活動を日々支えている支部友会員の力とともに、名古屋という地域の特長な事情にもよるところが大きいようだ。
話の最後に、支部の実力を示す刷り上がったばかりの支部報10月号が参加者に配られ、支部としての今後からJAC全体のあり方、将来にも及ぶ大きな話に膨らんで、楽しく終了した。
話題沸騰、興味津々の懇談会ではあったが、委員会としては企画集会のあり方に課題を残す集会でもあった。
(絹川祥夫)

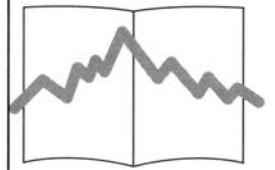


東海支部が登ったローツェ南壁全景(写真提供=中日新聞社)

【年始企画】中国チベット
岩崎元郎さんと行くチベット初詣ハイキング
青藏鉄道で崑崙山脈を越え聖地ラサへ8日間
1/5発 ¥348,000

西藏鉄道とラサ郊外ガンデン山夜間バラ峠の初詣ハイキング

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp



図書紹介



イヴオン・シュイナード・著

森 撰・訳

『社員をサーフィンに行かせよう―パタゴニア創業者の経営論』



2007年3月
東洋経済新報社刊
四六判 333頁
定価 1890円

まず、書名に驚かされた。山の図書紹介にふさわしくないと思われるかもしれないが、本書は伝説のクライマー、イヴオン・シュイナードの本である。「パタゴニア」を創業し、革新的な登山用具で登山界に大きな影響を与えた彼が、完成までに15年の歳月をかけただけに構成は論理的で説得力に富んでいる。

第一章「イントロダクション」の短い主張に続く、第二章「パタ

ゴニアの歴史」はシュイナードの

自伝そのものと言えるもので興味深い。クライミングと出会い、自らピトンを打ち鍛冶屋を自認して、シュイナード・イクイップメント社を立ち上げる。60〜70年代の登山の裏に隠されたヨセミテの歴史が生き生きと描かれ、彼らの登山を可能にした用具の製作過程と高い倫理感から提唱されたクリーンクライミングの誕生を知ることができる。

シュイナードは綿製品を改良し、他社に先駆けて再生繊維を使ったフリースを販売する中で、環境問題に開眼する。そして、「会社の意思決定のすべては環境の危機を考えて下す」としたその理念が、第三章「パタゴニアの理念」で語られる。更に自然環境を破壊しない企業活動を模索し続けた先が第四章の「地球のための1歩同盟」だ。自然環境の保護を推進する人々に

対し、少なくとも売上げの1割を寄付すると誓約し、実にさまざまな環境団体を支援する。そして環境に悪影響を与えない製品を作る努力を惜しまないと、第5章「百年後も存在する経営」で簡明に宣言する。

さて、なぜこの書名なのか――。

本当に社員はいつでもどこへでも出かけていいのか、本書にその回答がある。日本山岳会は積極的に自然保護の啓蒙運動に立ち上がるべきではないかとの声もあるが、その活動の実践と支援の方法など、本書から学ぶべきことは多い。著者が言うように「健康な地球がなければ、株主も、顧客も、社員も存在しない」し、私達登山者もまた存在しないのだ。

時には山の本から枝道に入って、世情に名高いビジネス書にはない魅力に富んだ本書を楽しめたらどうか。著者には本書のほかに「Climbing Ice」(邦題「アイスクライミング」山と溪谷社、坂下直枝・訳)がある。

(絹川祥夫)

『自然を読み解く山歩き』

小泉武栄・著



2007年4月
JTBパブリッシング刊
B6判 191頁
定価 1575円

著者は以前より、自然を多角的に見つめる山の自然学を提唱し、03年NPO団体「山の自然学」の設立に参加している。ただ山頂までを往復するだけでなく、その途中で動植物・地形や地質・気候等々に目を向け、観察し、不思議な現象があればなぜ、という好奇心を持つ、そして答えを考える。著者が名づけた「知的登山」とか「不思議を発見する山歩き」がその表われであろう。自然についての知識や好奇心を、ワンランク高めるためのガイドブックとして書かれたのが本書で、日本の山、または地域から特徴的な30カ所を選び、それぞれについて解説している。その一部を目次から紹介しよう。東京近郊に残る奇跡の山(高尾山)、大岩壁で大地の動きを探る(岩殿山)、高層湿原の成り立ちと不思議に迫る(尾瀬ヶ原)、縞枯れ現象は

本書を手にとつて眺めると『風に
乗って』という題名と、表紙の
帯に載っている村井葵氏の一文に、



2007年4月
双陽社刊 95頁
A4変形判 定価 2100円

『風に乗ってII』

村上直温・著

(茂見 猛)

好奇心が旺盛な人には、テーマと山の一致に合点がいくだろう。また、比較的時間に余裕のある高年登山者には、ぜひ実践していただきたい登山の方法ではないかと思われる。特に、日本百名山登頂の数を競っておられる人々には、ぜひ読んでいただき、山の広い知識を身につけていただきたいと思う。

なぜ起こるのか(編枯山)、日本一の火山に潜む数々の不思議(富士山)、火山と植物のせめぎあい(安達太良山)、なぜ槍ヶ岳の穂先は尖っているのか(槍ヶ岳)、山体に生じた巨大割れ目のなぞ(雪倉山)等々である。

著者のスケッチする絵姿が気持ちよく飛び込んでくる。村井氏は著者・村上直温さんの早稲田大学山岳部時代の無二の親友であり、かつて会報編集担当理事として『山』にたずさわった方でもある。帯には「一期一会の貴い瞬間を全霊をこめて切り取ろうとする、ちよくおんの心根に惚れ込んでいる。老後の生き甲斐を抜け目なく発見した老獺さを羨ましく思うのである」とある。まさにその通りで、著者がこの10年に接した山旅の想いを、そのまま現場で描き表わしたスケッチ画文集である。

10年前の還暦の時に『風に乗って』と題した画文集を出した著者は、今回70歳の古希を迎えて、自由気ままに楽しんだその後の10年間の山旅の想いを『風に乗ってII』というスケッチ画文集として出版した。242点のスケッチと32点の紀行文からなるこの画文集は、開くページごとにスケッチをする著者の姿がそのまま浮かんでくるのである。

このスケッチ画文集は、その原点が山にあるのは勿論であり「剣岳山行」や「北岳・間岳へ」にあるように、山に登ってその臨場感

をスケッチで表わすことにあるが、同時に、ありとあらゆる所に行つた山旅で、その触れ合う山との感触をすぐ絵筆で表わす。また、山そのものだけでなく、その原風景を形造っている景色や建物、人物をその場で「ちよくおん」の世界に取り込んで表わしているのである。国内だけでなく、山仲間と行ったモンゴルとネパールの山旅は、風景や人物の描写と文が楽しくて、一緒に旅をしている気分になせられた。

思えばこの10年間、著者とは日本山岳会のアルパインスケッチクラブの仲間として一緒にクラブ活動に携ってきた思いがある。しかし、筆者がほとんど知らない世界での現場スケッチがあまりにも数多くあるのを知って、著者の山の世界の深さと大きさに驚くばかりである。

この『風に乗ってII』の画文集を眺めて読んでいると、そこには「ちよくおん」の風が吹き、歌が流れて物語が作られていくのである。

(深川 安明)

*注文先は(株)双陽社まで (TEL) 06

6341-0188 (FAX) 06-16

341-0178)

図書受入報告 (2007年9月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
大森久雄	山の旅 本の旅——登る歓び、読む愉しみ	237pp/20cm	平凡社	2007	出版社寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2007 ——全国日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	237pp/22cm	全日本山岳写真協会	2007	清水正己氏寄贈
いのまじし(写真・解説)	日本の野菊(山溪ハンディ図鑑 No.11)	279pp/21cm	山と溪谷社	2007	出版社寄贈
志水哲也	日本の幻の滝	144pp/29cm	山と溪谷社	2007	出版社寄贈
野口冬人	書斎のビバーク	348pp/23cm	日本山書会の会	2007	著者寄贈
高橋千鶴破	名山の文化史	347pp/20cm	河出書房新社	2007	出版社寄贈
佐藤節	峠の譜	198pp/21cm	佐藤節(私家版)	2007	著者
田部井淳子	高いところが好き——最高峰に魅せられて(小学館文庫 No.552)	317pp/15cm	小学館	2007	出版社寄贈
斎藤惇生(編)	北アルプス大日岳の事故と事件	175pp/22cm	ナカニシヤ出版	2007	出版社寄贈
久保正人	四方山話——山旅の中から地域を見る 全国編	207pp/19cm	久保正人(私家版)	2007	著者寄贈
日本山岳会京都支部(編)	左千方登山事故調査報告	44pp/26cm	日本山岳会京都支部	2007	発行者寄贈
S.Pritchard-Jones	The Mount Kailash Trek —A Trekker's and Visitor's Guide	202pp/18cm	Cicerone	2007	出版社寄贈
Gory Europy	Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu (Tom III)	847pp/25cm	Stapis	2007	編者寄贈



平成19年度第5回(9月度)理事会

日時 19年9月12日 18時30分

20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、鰐坂・神崎各副会長、吉永・宮崎・成川各常務理事、斎藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬・山川・岡部各理事、深川・竹中各監事、日下田・河野・近藤各常任評議員、神長会報編集委員長

●本日の議事をまとめるにあたり、議事録署名人1名として、相馬勉理事を選任した。

【審議事項】

1・写真掲載許可願：北日本新聞社

冠松次郎と宇治長次郎の登山風景の写真(宇奈月歴史民族博物館に保存の複製写真から原稿作成)。

(承認)

報告

2・助成願：第23回全国支部懇談会(岩手支部10月6～7日開催)

20万円助成。

(承認)

3・名義後援依頼：社団法人東京都山岳連盟

第15回日本山岳耐久レース(10月20～21日実施)。

(承認)

4・『日本山岳会百年史』の会員頒布価格

在庫の『日本山岳会百年史』(本編・資料編)を会員に限り5000円で頒布する。

(承認)

5・資料借用申請：富山県立山博物館

平成19年度特別展(借用期間9月8日～11月11日)に冠松次郎資料から5万分の1地形図5点、別宮俊映画作品「黒部の秋」オリジナルフィルム2点。

(承認)

6・後援依頼：信州大学附属図書館

(承認)

「岳都松本 小谷コレクション展

」

—信州大学の名品—(10月20日、12月9日松本市立博物館で開催)。

(承認)

【報告事項】

1・『アルパインニュース』への寄附(吉永)

Mr.Francis Sogesより

『JAPANESE ALPINE NEWS』の

お礼として、1000ドル寄附。

2・黒部市歴史民俗資料館特別展開会式案内(宮崎)

8月4日実施、黒部市教育委員会。

3・中国登山協会表敬訪問(鰐坂)

鰐坂副会長が会長代理として訪問(8月13日)。

4・シッキム最新登山情報(斎藤)

中村保会員より海外情報。

●シッキム登山情報：5～6000

0～5座が解禁された。

●チョモランマ(エヴェレスト)

の2008年事情：聖火リレーに伴う規制がうわさされているが、

条件を満たしている隊については

登山許可が出る様子。

5・平成19年度第2回支部長会議報告(神崎)

9月8～9日、上高地山岳研究所において開催された。

所において開催された。

6・秩父宮記念山岳賞締め切り(宮崎)

8月末締め切り。「カンリガルボ

山群の踏査と研究」松本恒夫(No.

4607)1名の応募があった。

7・平成19年度社会人登山リーダー研修会2案内(宮崎)

文部科学省登山研修所(9月13

～17日)で開催される。文部科学省

8・韓国山岳会創立62周年記念式典案内(宮下)

9月14～16日、宮下会長、神崎

副会長、宮崎・吉永両常務理事が

参加予定。

9・福岡支部設立50周年記念祝賀会案内(神崎)

9月29～30日、福岡国際ホール

にて開催。

10・日本ヒマラヤ協会創立40周年記念祝賀会(宮崎)

10月13日、主婦会館プラザエフ

にて開催。

11・セミナー：雪山救助現場の実際ほか案内(古野)

指導委員会主催で山岳スキー愛好家を対象に次の講習会を実施する。

①11月6日、「雪山救助現場の実際」講師：長野県警察山岳救助隊長の平出剛。

長

の平出剛。

長

の平出剛。

長

の平出剛。

長

の平出剛。

長

②12月8日、「机上講習 救命救急法」。講師：メディアワークス代表の恵秀彦。

③1月16日、「机上講習 ロープワーク」。講師：国際山岳ガイドの棚橋靖。

④2月23日、「実地講習 雪崩対策及びセルフレスキュー」。講師：国際山岳ガイドの棚橋靖。

12・松本国際山岳自然環境会議2007案内(神崎)

10月7～8日「Mウイング」で開催。アジア山岳連盟。

13・熊本支部創立50周年記念式典案内(鯨坂)

11月17～18日、熊本市交通センターホテルで開催。

14・会報『山』9月号、『山岳』編集報告(成川)

15・会報『山』8月号の記事について(宮崎)

「日本山岳会への提言」の文中「おわりに」の項で理事会に関する記述に誤解を招く表現があったので、理事会の席で以下の確認をした。

①：文中「最後の理事会で承認を得たうえで発表したそうだ」は、「引継ぎ書は前期最後の理事会で承認はされていない」。

②：文中「理事会の引継ぎのため、

新旧理事出席のもと、公式に引継がれているとのことである」は、「引継ぎの説明会は5月23日、前会長・前副会長・前財務担当常務理事と今年度の役員及び評議員の一部の出席で行なわれ、主に前会長から引継ぎ事項の説明があった。後日文章にまとめるとのことでの席では書面による引継ぎはなされていない」。

③：文中「理事と委員長との関係は、昨年度とまったく変わってしまつて」は、「昨年度と基本的には変わっていない。昨年度までは、総務・財務以外の委員会管轄は会長・副会長が担当していたものを今年度は各理事の担当として会長・副会長の負担を減らし、併せてより細かく委員会を見られるようにしたものである」。

16・8月度入会者0名、復活者1名

ルーム日誌 9月

3日 総務委員会

4日 図書委員会 アルパインス ケッチクラブ

5日 常務理事会 集会委員会 山岳地理クラブ

6日 指導委員会 アルパインス

キークラブ フォトビデオクラブ

7日 プモリ研究会 101の会

10日 総務委員会 アルパインス

11日 キークラブ

アルパインスケッチクラブ

九五会

12日 理事会 アルパインスキー

クラブ 山想倶楽部

13日 山の自然学研究会 山遊会

14日 フォトビデオクラブ

15日 SUN燦会

18日 山研運営委員会 インター

ネット小委員会 アルパ

インスキークラブ ゆき

わり会

19日 資料映像委員会 三水会

つくも会

20日 科学委員会

21日 秩父宮審査委員会 会報編

集委員会

25日 青年部 00会 千葉支部

26日 自然保護委員会 麗山会

27日 図書委員会 山遊会

28日 101会

9月来室者489名

会員異動(9月)

退会

松木伸吉(12838) 京都



◆晩餐会記念山行のご案内

集委員会

本年はハイキングコースとして人気のある「大山」です。大山(1252^{メートル})は「雨降山」とも呼ばれ、山頂には阿夫利神社、途中には関東三大不動の一つ大山寺もあり、古くから信仰登山の山として親しまれています。秦野からバスでヤビツ峠、歩いて1時間で大山山頂、下りは下社まで歩き後はケーブルカーで下り伊勢原へ出る周遊コースです。頂上では恒例の豚汁を用意しています。

◆第11回森の勉強会「伊勢の森」

東海・京都・関西支部共催

伊勢神宮宮域林の照葉樹林の探勝と「森林の生態」を学びます。

日程 11月10日(土)～11日(日)

集合 10日12時 神宮会館(伊勢市宇治中之切町)

日程 ■10日 座学(森林の生態)

インフォメーション

／酒井章子氏

■11日 照葉樹林歩き(剣峠・京地山北面/木村政生・川合寿之各氏他)

費用 2万円(宿泊、現地交通費、通信費等)

募集 50名(先着順)

申込 10月31日迄に、斧田一陽まで(〒567-0862 茨木市美沢町)

11-B-11103 FAX 072-

633-6556

*申込者に詳細を送ります

◆講演会のお知らせ

科学委員会

かつて山岳会会員が活躍した氷河地形研究は、第二次大戦後大きく様変わりしました。その経緯と現状を概説します。

日時 11月15日(木)18時30分より

場所 日本山岳会104号室
演題 日本の氷河地形を巡る研究の歴史

演者 小崎 尚会員

*参加申込み・参加費不要

◆第38回・山岳図書を語る夕べ

図書委員会

本会100周年記念『新日本山岳誌』など、活発な山岳図書の出版を続けるナカニシヤ出版社長に、表話裏話を語っていただきます。

テーマ 「山岳図書の出版事情」

語り手 中西健夫氏

日時 11月19日(月)18時30分より

場所 山岳会104号室

問合 平井吉夫 TEL 03-33388151 FAX 03-33388140

*参加申込み・参加費不要

◆フィルム・アーカイブス交響詩

『立山』上映

資料映像委員会

交響詩『立山』(昭和46年度作品、40分)は、交響曲(音楽・黛敏郎)、映像(総監督・松山善三)の作品。

音楽と映像の織りなす巧みなハイモニターで『立山』の魅力を紹介した名作です。当日は、山岳関係の「ニュース映画」も上映予定。ぜひ、ご鑑賞ください。

日時 11月26日(月)19時より

場所 山岳会104号室

事務局職員募集

本会事務局の職員を募集します。会員各位のお知り合いのなかで、事務局職員として適当な方がおられましたらご紹介ください。募集要領は下記のとおりです。

募集人員 1名(男女を問いません)

募集期間 平成19年10月20日～11月10日

原則として30歳以上50歳までの方

勤務時間 月曜～土曜(10時～21時の間のローテーション勤務、ローテーションにより週休2日確保)

給与等 本会規定による(賞与年2回、社会保険有、交通費支給)

必要書類 履歴書および紹介者名

面接日 平成19年11月11日(日) 午後1時(予定)

*連絡先: 本会事務局 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441

◆「上高地山研」年末年始のオープンについて

山研運営委員会

年末年始の5日間、今年も委員が山研に常駐。この期間は仮設のトイレ、排水等を完備してオープンしますので、宿泊希望の会員を募集します。

期間 19年12月30日～20年1月3

●さんけん通信●

大自然の中に都市生活の恩恵

山研管理人 内野かおり

9月のある週末のことです。この日は、恒例となった三水会行事「薬湯とあんころもちの会」が開催されており、十数人の宿泊者がいました。土曜日の夜10時に消灯した後、就寝。明け方、ふと目を覚ますと、いつもぼんやりと部屋の中を照らす赤い豆電球の光がなく、真っ暗……。ビデオのデジタル時計の表示も見えず、時刻の確認もできません。暗闇の中、寝起きの頭はわずかに異変をキャッチし、そして、だんだんと状況を理解しました。「停電だ！」。

外の様子を見に行ったら夫によると、どうやら上高地中が停電らしい。雷雨などの時には準備もしますが、いきなり停電とは、なんだか嫌な予感です。停電で困ることを考えた時、まず頭にうかんだのが「水」です。山研ではタンクからポンプで給水する仕組みになっています。お客さんが起き出したら、まずトイレの「水」を何とかしなくてはなりません。幸い、昨日の風呂の残り湯があるので、地下のトイレを使って各自バケツで流せば解決。飲料水については、水力発電用の水がすぐ近くのドラム缶にたっぷり出ているので、ヤカンやポリタンクで運んでくれば問題無さそうです。でも、朝食のご飯は？ 停電が長引いたときの冷蔵庫の中身は？ など等……。他にも考えだしたらきりがありません。

異変を察して起きだしてきたお客さんたちは、「停電か？ まあ仕方ないなあ……」と、落ち着いた対応でした。いつもだと、誰となく点けるテレビの音もなく、自然と会話が弾み、「進駐軍

のメタでご飯を炊いたら3時間かった」という昔話もでて、大笑いしました。

はじめのうちは、そのうち回復するだろうと待っていましたが、いつまでたっても電気は点きません。そこで、ご飯をなべで炊くことにしました。山小屋で働いている頃、圧力鍋でご飯を炊いていましたが、それも昔の話。最近は電気炊飯器にお任せの生活です。「はじめチョロチョロなかパッパ」でご飯が炊けることは知っていても、実際に炊くのは初めてのこと。インターネットで「なべ、炊飯」などと入力して検索、分からない事はすぐに何でも情報を得られるのに、停電ではそれもないません。大学ワンゲル時代の古い記憶をたどりながら挑戦。ドキドキしながら炊いたご飯でしたが、上出来！ほっとしました。電気炊飯器と遜色なく、美味しいおこげもできました。

他の施設もさぞ困っているだろうと思いました。大きな旅館やホテルは自家発電機を回して通常より少し節電しつつも営業しているようでした。

山研には発電機はありませんが、ミニ水力発電（普段は主に地下の照明用、除湿機用に使用）が大活躍しました。ミニ水力発電は、大きい消費電力の電気製品には使えませんが、電話なら十分に対応できます。おかげで、電話が復旧。早速、電話で「落石が何かで断線したようで午後2時くらいには回復する」という情報を得ることができました。結局、昼前に何ごとも無かったように電気がポツと点き、8時間の停電は終わりました。

普段は、鳥の声で目を覚まし、沢の水を飲み、街灯の無い夜道を歩き、3000_円の高峰に囲まれる大自然の中に暮らしています。でも、その大自然での生活には都市生活の恩恵も関与しているのだと、としみじみ感じた半日でした。

◆編集後記◆

●今月号でも山梨支部の活動、支部だよりで秋田、福井、東海支部の活動が報告されています。積極的に活動している支部の話は、本部にとっても大変励みになります。参考になる点も多いようです。

●その各支部の支部報にも、興味深いものがあります。特に「東海支部報」の充実ぶりには、目を見張るものがあります。「山」も負けてはいられません。なお一層の充実を図るべく、気を引き締めて編集に当たるつもりです。

(神長幹雄)

日まで

申込 11月末までに坂本正智まで

TEL & FAX 042-373-3238

*申込者に詳細を送ります

日本山岳会報 山 749号

2007年(平成19年)10月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社